



Title	季節の喜び
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1973, 2, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本の四季、私は宇宙天地のこの自然現象をこよなく愛する者の一人である。北海道の涯(はて)から沖縄の南端まで直線距離にして約二四三六km余。これは前に昭和基地より南極点踏破に成功した村山越冬観測隊長が築いた極点調査旅行隊の距離(二三五二km)にほぼ相当するのではないかと、思う。

る。春は百花繚乱(りょうらん)、夏は海に、山にはほととぎす、秋に中秋の明月を愛(めで)ての宴、菊の九重の節句、冬は細雪(さざめゆき)のなかに雪だるまとスキーに楽しめる少年時代の思い出などは国外では到底味うべくもない四季のうつりかわりでもある。

り日本人あけての喜んであります。私はその名文の一節を借用することをお許しいただきにこよなに紹介申上げる。(朝日新聞十二月二十六日所載)美しい日本の私―その序説―春は花夏はほととぎす秋は月冬は雪さえて冷(すず)しきりけり道元禪師(一一〇〇年~五三年)

云云。これは序文のごく一部ですが、日本人の祖先の多くの先哲は日本国土の四季を歌心として、貴い大和心の神髄（しんずい）を示されておりま
す。この一事をもつてしても利

道源と河川、日照権すら叫ばなければならなくなつた過密都市の現状等、人類に生きるために平等に授かつた天の恵みが人間のあくなき欲望のために破壊されていくことは宇宙、天の攝理

この東西に伸びた長い国土には春夏秋冬という自然のうつり変わりは日本人にして味わいうる楽しくも嬉しい特権ではなかろうか？この美しい自然の四季のうつり変わりに長く住みなれでいるともすればこれに不平をいう者もある。かつて私もその一人であった。しかし一度歩外国に出たとき日本の国土四季の美しさは日本国に住む者の最大の天の恵みであると感謝す

季節の喜び

辻野直一郎

さきに日本人として初めてのノーベル文学世界賞を受けられた故川端康成先生は一九六八年十二月二日、ストックホルムのスウェーデン・アカデミーで「美しい日本の私—その序説」と題して受賞記念講演をなされましたが、これは記憶に新しいことでもない。

歌との「本来の面目」と題するこの歌と
雲を出でて秋にともなふ冬の日
風や身にしむ雪や冷たき。
明惠上人（一一七三年～一二三〇年）のこの歌とを私は揮琴（きき）
（こう）を求められた折に書く（この歌）
とがあります。明恵のこの歌に

は日本の國土の美しさを知らなか
い國民は眞の日本人として、國
を語る資格はないのではないか
？と思う。しかしながら終戦後
高度経済成長の影に、如何に多
くのこの美しかるべき國土、自
然環境が破壊され人災の名に
おいて豪雨禍になやまされ、或

失われた自然と環境は永遠に原
（もと）にかえらないものもあ
る。今こそ声を大にして未来と
子孫へ引継ぐためにも天下に叫
ぼうではありませんか？